

Global×Innovation人材育成フォーラム（第2回）

1. 日時：令和6年7月30日（火）16：00～18：00

2. 場所：文部科学省11F省議室

3. 出席者

委員

小路座長，大槻委員，南場委員，日色委員，廣津留委員，藤井委員，

Pezzotti 委員，前川委員，正宗委員，吉岡委員の各委員

オブザーバー

文部科学省 伊藤高等教育局長，茂里総合教育政策局長

経済産業省 藤木経済産業政策局長（代理：井上経済産業政策局担当審議官）

文部科学省（事務局）

藤原文部科学事務次官，矢野文部科学審議官，

奥野大臣官房審議官，中野国際教育課長，

佐藤参事官（国際担当），下岡留学生交流室長ほか

説明者

湯崎英彦 広島県知事

渡辺太陽 滋賀大学経済学部ファイナンス学科4年

【小路座長】 改めまして，座長の小路と申します。よろしくお願ひいたします。それでは定刻となりましたので，第2回目のGlobal×Innovation人材育成フォーラムを開催いたしたいと思ひます。本日東京，都心36度ということで大変暑い中，御参加をいただきまして，また，オンラインの方もお忙しいところ，御参加をいただきまして改めて御礼申し上げます。

では，時間も限られていますので，まず冒頭，事務局から委員の皆さんの出席状況と配付いたしました資料について確認，御説明をお願ひいたします。

【伊東視学官】 本日は10名の委員に御出席をいただいております。

会場では小路座長，大槻委員，日色委員，藤井委員，Pezzotti委員，吉岡委員の6名の委員に御出席をいただいております。

また，オンラインでは南場委員，廣津留委員，前川委員，正宗委員の4名に御出席をいただいております。

伊藤委員、田中委員は御欠席となっております。

また、オブザーバーに人事異動がございました。高等教育局長に伊藤が、総合教育政策局長に茂里が着任いたしました。今回よりオブザーバーとして陪席をいたします。また、経済産業省からは藤木局長の代理として経済産業政策局担当井上審議官が出席しておりますのでよろしくお願ひいたします。事務局からは本日、藤原文部科学事務次官、藤江に代わりまして矢野文部科学審議官、奥野大臣官房審議官、中野国際教育課長、佐藤国際担当参事官、下岡留学生交流室長が出席をしております。

配付資料は次第に記載のとおりであり、事前にメールでお送りするとともに、文部科学省のホームページにも掲載をしております。よろしくお願ひいたします。

【小路座長】 それでは次に、引き続きまして前回の会議の議事概要につきましては各委員の皆様に一応御確認をいただきまして、取りまとめたものを委員の皆様へお届けをいたしました。

これについて、御了解いただきたいと思いますが、1点、氏名など公表にもなりますので、その辺事務局から一言申し添えていただければと思います。

【伊東視学官】 机上資料といたしまして、前回の議事概要の案をお配りさせていただいております。委員のお名前と、発言につきましては、それぞれの発言をそのまま掲載するような形にしてございます。御確認いただければと思います。

【小路座長】 ありがとうございます。それでは、この内容について御了解をいただけますでしょうか。よろしゅうございますでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【小路座長】 ありがとうございます。

それでは皆さんのお名前を含めまして、文部科学省のホームページで公開をさせていただきたいと思ひます。

前回の会議では御出席の委員の皆様から、このフォーラムで議論すべき内容、また、どのような論点を議論したらよいか、これらについて貴重な御意見を頂きました。前回御欠席だった廣津留委員から5分程度お話をいただきたいという申出がありましたので、お話をいただきたいと思ひますのでよろしくお願ひいたします。

【廣津留委員】 皆様、こんにちは。はじめまして、廣津留すみれと申します。まずは前回どうしても出席がかなわず、失礼いたしました。皆様の御発言は議事録で拝読いたしました。これからどうぞよろしくお願ひいたします。

自己紹介を兼ねてですけれども、私はバイオリニストをメインにしております、国内外、大体年50から60本こなしておりますが、教育分野でも留学が必須で英語キャンパスの秋田の国際教養大学で准教授を務めたり、あと、地元の大分市で教育委員をやっていたり、昨年は内閣の官房の教育未来創造会議でも大変お世話になりました。アメリカで9年ほど過ごしたんですけれども、地元の大分では今年12年目になるんですけれども、大学1年生のときに始めましたSummer in JAPANという英語セミナーで、今年はハーバード生とAPUとAIUの現役大学生を巻き込みまして小中高生向けの会、完全英語のワークショップを開催しております。

私は3歳からバイオリンを始めまして、小さい頃から本当に好きだったことを今、仕事にしているんですけれども、大学院に行くまで音楽学校には通わず、小中高は大分の公立、大学からハーバード大学に行きまして、大学院はニューヨークのジュリアード音楽院でバイオリンを勉強いたしました。音楽院に初めて行ったのが大学院なのでキャリア的には回り道のようにも見えるんですけれども、私的にはこれがよかったなと思っていて、そこが留学を勧めたい理由でもありまして、学生時代を海外で過ごした身としてお勧めというか、海外を推したい理由を3つ述べさせていただきたいと思うんですけれども。

まず1つ目としては、シンプルにもう海外でまるっきり文化の違う人たちと住むという経験ですね。もう初めてルームメイトと、大分から突然出てきて初めて住んだ寮で自分がきれいに畳んでおいた靴下を勝手に履かれて、何か、だってstealableだからとかって言われて、そこで怒らずにロジカルに、何で人の靴下を履いてはいけないかを説明した経験ですとか、何か、そういうもう世界の普通とか常識が存在しないんだなというのが分かって、本当に留学というのはこういう体験に尽きると思うんですけれども。

あとは、2つ目としては自己実現の考え方ですね。私はもうずっとバイオリンやっていたんですけれども、こうやりたいことがあったら、それ1本に絞って真っ直ぐに進むのが今まではそれが称賛されてきたんですけれども、これからはリベラルアーツ的に分野を横断して学ぶことも同じくらい大事ななと思っております。ましてや、もう音楽にしる、スポーツにしる、他の知見を深めたからこそできるパフォーマンスというのがあると信じているので、その上でも海外に出ているいろんな分野を見てシェアを広げることってすごく大事ななと思っています。

あと、3つ目としては、海外でも女性リーダーが当たり前活躍している環境とか、自分が目指すところが同じ人がたくさんいる環境があって、そこに身を置くことですか、

課外活動を極めながらも学業をトップレベルで普通にこなす人がいる環境に身を置くことができるというのが、そうすると自分が特別なことをしている感覚なく、そういうスキルが身につくのでとても大事なことかなと思うんですけども、こういう理由で勧めたいんですが、例えば自分が出た大分の公立の高校の後輩たちにこれをうまく伝えるすべが、なかなか私だけでは足りないというか、これを言ったところで親の説得ができるのかとか、先生のマインドチェンジができるのかという、これがなかなか本当に難しいところだなと自分のふるさとの大分だけを見ているとすごく思うので、そこにぜひ皆さんの改革などを期待したいなと思っております。

あと、少しだけ音楽的な目線でお話しして終わろうかなと思うんですけども、日本と海外の音楽教育の違いもかなり私が衝撃を受けたところでして、日本は伝統芸能にもあるやり方ですけど、私が、先生がここはこう弾きますって言って、もう完全にそれをコピーするのが先生とのやり方ですけども、アメリカに行くとどう弾きたいのって、まず言われるんですよ。主体性が全てなので自分のビジョンを持ってこないレッスンが進まないというのがあって、先生が教えてくれるときも、私はこう弾くけど、あなたはちなみにどうというスタンスでやってくれるので、学生のことを信頼しているところが大きいなと思います。

つまり、教育というのは手取り足取り全部教えるということではなくて、先生が生徒の背中を押すということが大事で、自分がこうあるべきだとカテゴライズするんじゃなくて、現代音楽とかジャンルを超えたコラボレーションとかにもどんどん挑戦させてもらえた土壌があったからこそ、今、本当に世界の仲間と色々なジャンルでセッションができるようになったと思っています。

なので留学すると、本当にいろいろな文化を取り入れてオープンマインドになるということだと私は信じています。なので、この会議のテーマであるイノベーションを起こすには、そういう教育に変えていかなければならないと思いますし、そういう方向に変えることと、それが実現されるまでは海外でそういう教育を受けられるところに派遣するというのを同時にやるべきかなと思っております。

というところで大体ちょっと5分たってしまいましたので、言いたいことはたくさんあるんですけども、これからもよろしく願いいたします。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。おっしゃりたいこと、たくさんおありになる

ということで、よろしかったら後ほど御意見をいただければと。大変貴重なお話をいただきましてありがとうございました。

それでは早速、本日の議事に入りたいと思いますが、本日も前回に引き続きまして2名の方にお話をいただきまして、若干時間が短いんですけども皆さんから質疑あれば質疑をいただいて、その後に望ましい留学の姿というようなことについて、本日はフリーにディスカッションというか、意見をおっしゃっていただいて、本日は終了したいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

それでは、まず高等学校段階の留学、あるいは国際交流を推進されている自治体の長として、大変今、積極的におやりになっている広島県知事の湯崎英彦知事をお願いをしてお越しをいただいております。

オンラインでお話をいただきますが、大変短くて恐縮ですけれども10分程度で湯崎知事からお話をいただきまして、その後、少し質疑をさせていただければと思いますので、よろしくお願いたします。

それでは湯崎知事、よろしくお願いたします。

【湯崎知事】 ありがとうございます。広島県知事の湯崎でございます。本日は大変貴重なお時間をいただきまして、Global×Innovation人材育成フォーラムで御説明の機会をいただき、ありがとうございます。

私から広島県の留学促進、それからグローバル人材育成に係る取組についてお話をさせていただければと思いますが、次のページをお願いします。まず、私ども、ベースとして高校段階の取組について4つのお話をさせていただければと思うんですが、まず、第1段階として県立学校の姉妹交流、それから第2段階として留学促進の充実、そして第3段階として学びの変革というのを今、広島県が行っておりますが、それを先導的に実践する全寮制の中高一貫校、広島叡智学園を開校した、これについて御説明をさせていただきます。

次のページをお願いします。まず、Phase1、第1段階、姉妹校ですけれども、これは私が就任をいたしまして平成22年度までに13校が海外姉妹校を持っていたんですけども、この姉妹校というのがいろんなもののベースになるだろうということで、平成23年度から県立学校海外交流促進事業というのを行いました。全高校、全公立高校、これは特別支援学校も含まれますけれども、で姉妹校提携を海外としようということで、4年間の間に全84校が14か国、それから97校の学校と姉妹校提携を締結しております。

次のページをお願いします。その状況でございますけれども、現在18の国と地域、138の

学校と姉妹交流を行っています。台湾35校，それからアメリカは29校ということで1番，2番となっております。ちなみにハワイが我々，州と県で姉妹提携しておりますので15校ございます。

次のページ，お願いします。学校では姉妹校への短期留学であるとか，あるいは姉妹校からの留学生の受入れを行うといったようなことをやっておりますし，コロナ禍以降ではオンラインが，これはうまく逆に使えるようになりましてオンラインでの事前学習，それから実際の対面での交流を組み合わせるような形で非常に効果的な交流が今，できるようになっております。それぞれの交流事例について，県教育委員会のホームページでも，こんなことやっているというのを載せまして，他校に参考にしてもらって改善を図るようなことも行っております。

次のページ，お願いします。それから第2段階，Phase2として平成27年度以降，取り組んでいることですが，本県におきましては平成26年に広島版「学びの変革」アクション・プランというのを策定いたしまして，先ほど申し上げた県立学校海外交流促進事業を引き継ぐ形で異文化間活動推進事業の取組というのをスタートしています。これまでの姉妹校交流に加えて，教育委員会が主体となって生徒の留学促進を行う取組をしております。

次のページをお願いします。この中では教育委員会が主催する短期留学プログラムを開発しております。例えば広島県教育委員会とオーストラリアのクイーンズランドで平成26年度に教育分野に関する協力協定を締結しまして，この協定に基づいて低コストで安全安心な留学プログラムの開発というのを行っています。例えば，これ，昨年度は15名の高校生がクイーンズランド州のケアンズでホームステイを含む短期留学を行っています。

次のページ，お願いします。それから経費の支援ですね。こちらも非常に重要だと思っております。国の補助金なども活用しまして経費の支援を行っているんですが，特に昨今では円安の影響で経費高騰していますので，こういった制度はますます必要性が高くなってきていると考えております。これ以外にも国のトビタテ！留学JAPANなどの制度についても周知を行って活用してもらっています。

次のページ，お願いします。経済的支援のほかにも，海外留学に挑戦したいと考えている高校生の相談体制を整えるために，県の教育委員会に異文化間協働活動支援員というのを設置しています。これは海外留学経験者だとか，旅行会社の勤務経験がある人を配置しております。いろんな留学に関する相談対応を行っているほか，留学機運醸成のためのイベントの企画であるとか，冊子を作ったりといったような業務を行っております。

次、お願いします。Phase3, 第3段階, 広島叡智学園についてであります。学びの変革というのは子供たちの, まさに教育から学びに変革していくというところですが、これを先導的に実践する全寮制の中高一貫校を広島県立広島叡智学園として平成31年に開学しております。これは大崎上島町という瀬戸内海の離島に設置をいたしました。1学年40名で高校からは主に外国人留学生, 一部日本国籍の外国で育った子供たちもいますけれども, 20名を加えて, 60名で学びの場をつくっております。日本人, 外国人, お互いに多様性を認め合って, とともに学ぶグローバルな教育環境というのを実現しているところです。

次、お願いします。この学園のミッションとして, 持続可能な社会を構築して, 国際社会の平和と発展に貢献できる人材の育成というのを掲げております。広島に対して深い愛着を持ってもらうとともに, 世界の舞台で通用する, これ, 実は世界の舞台と言っていますけど世界だけじゃなくて, どこでも中山間地域とかも含めて, どこでも通用する高度な資質能力を育むということで, このことを目指して進めております。

次、お願いします。叡智学園の特徴といたしまして, いわゆるIB, 国際バカロレアを基に進めているということがあります。御承知のとおり, このIBを取れば海外の大学に入学資格を得ることができるんですが, 英語IBが取れるということになって, 日本語でも取れますけれども, 英語IBで, 英語の授業も行っているということで, 英語で議論したり論文を書いたりというようなアカデミックな英語力まで育成をすることで取り組んでおります。

次のページ, お願いします。2つ目の特徴ですが、これ, 全寮制にして異年齢, それから多国籍のメンバーと共同生活を送っています。各ユニットでは生徒の中からリーダーを選びまして, そのリーダーが中心となって話し合いを頻繁に行うと。また, 後輩の支援や指導を行うということで自立的に運営をしているわけですが, 学校の間だけではなく寮に戻っても, 言わばプライベートな時間ですが、その中でも多様性のある環境に身を置く形で, 異なる文化や価値観を持つ人々と協働する力が育ってミッションに掲げたような人材育成ができると考えております。

次、お願いします。最後は, これまでの取組の成果と今後の課題ですが、留学生数の状況ですね。先ほど御説明したように, 姉妹校提携の促進であるとか短期留学プログラムの開発といった取組の結果, 平成23年度には57名だった留学生数が平成30年度には約8倍の468名に増加をしております。その後, コロナがあったので激減しているわけですが

れども、コロナ禍以降、徐々に今、数は回復をしております、今後はまずコロナ前の水準まで回復することを目指したいと思っております。

次のページ、お願いします。実際に、この留学経験した高校生の声を聞くと、ここ、御覧いただいているようにかなり大きなインパクト、あったと、非常に貴重な経験をしているということでもあります。また同時にこういった経験、将来の進路決定にも影響を及ぼしているということで、中等教育など早期の段階から海外留学を経験するのは非常に重要だと思っております。

次のページ、お願いします。留学者数、増やすというのは一応増えているんですが、課題としては、長期の留学者数というのはまだ増加していないということが今後の課題だと思います。短期留学ももちろん一定のメリット、意義があると思いますけれども、国際感覚を、何というんですかね、ある意味、真に身につけた人材を育成する観点からはある程度、長期にわたって留学を行うほうがいいのかなと思っております、叡智学園では日本人生徒と外国人留学生が共同生活することによって長期留学をしているような状況が広島県の中にできていますけれども、こういった叡智学園のような取組等も併せまして今後の課題であります長期留学者を増やすということについて、国の支援なども活用しながら進めていきたいと考えているところでございます。

私からは以上でございます。ありがとうございました。

【小路座長】 湯崎知事、ありがとうございました。留学の促進、またグローバル人材育成について積極的にお取組をされているということで、大変参考になりました。湯崎知事、4時半に公務で御退出ということで、今回時間が短くて大変申し訳ありませんけど、できますれば皆さん、たくさん御意見、御質問がおありになろうかと思えますけど、時間の都合でお一人様にさせていただければと思いますので、御質問等ございましたら挙手をお願いいたします。

藤井先生、どうぞ。

【藤井委員】 東京大学、藤井と申します。御説明ありがとうございました。大変意欲的な取組で非常に感銘を受けました。実際、この留学を経験された高校生の皆さんが、その後、どういう進路に進まれたかということと、広島県として最終的にどれぐらいのボリューム感の留学者数を狙っていらっしゃるかについて、お聞かせ願えないでしょうか。

【小路座長】 知事、お願いいたします。

【湯崎知事】 ありがとうございます。進路という意味ではもちろん非常に多種多様で

すけれども、国際関係の、何ていいますか、勉強したり、あるいは仕事に就いて行ったり、我々、平和の関係もあるので、そういった平和関係について関心を持ってそういった道に進んでもらったり、いろんな進路があると思います。

我々の最終的な目標というか、単純に数でいうと、それなりに今500人レベルというところにきておまして、大体1学年に広島県、今の子供たちだと2万人ぐらいいるんですね。それ、それなりの数にはなってきていますけれども、これは我々としてはもうちょっと増やしたいなという、何よりも先ほど申し上げたように今、短期で400とか500とかというレベルですけれども、これが長期になるとすごくいいなと思っております。長期で、これも具体的な数というところありますけれども、長期で数百人という単位で勢いになると相当なインパクトがあるんじゃないかなと考えているところです。

【藤井委員】 ありがとうございます。そうしますと進路の中でも、この叡智学園もIB校であるということですので、例えば海外の大学に直接進学される生徒さんなどについても目に見えて増える傾向はあるのでしょうか。

【湯崎知事】 そうですね。留学生、留学経験者が直接海外に、留学というか進学ですよ、しているケースもございますし、そんなにたくさんあるわけじゃありませんけれども、まだですね。それから叡智学園は今年最初の学年が3年生になっておまして、いよいよ来年の春に卒業する状況で今、進学希望なんかも我々が聞いて、その支援をしているところですけれども、その中ではかなりの数が直接海外の大学に進学したいと言っておまして、そういう意味では特に叡智学園なんかは、何ていいますか、グローバルに完全に開かれた状況になっていると思います。日本の大学に行きたいという子もいますけれども、海外のほうが多いのかな、全体でいうと、それぐらいの感じだと思います。

【藤井委員】 どうもありがとうございました。

【小路座長】 ありがとうございました。あと3分ちょっとですけれども、多分御質問をさせていただくとオーバーしてしまいますので、最後に湯崎知事から何か私どもに対して御意見なり、御要望等ありましたらお願いできますでしょうか。

【湯崎知事】 そうですね。先ほど廣津留さんからもお話ありましたが、私自身も高校と、それから大学院で留学をしておるんですが、今、私の周囲を見ても海外経験をした人たちというのがいろんな場面で活躍していると思うんですね。それは国際的な場面ということだけにかかわらず、国内の問題を取り扱う上でもそういったグローバルな感覚というのは非常に重要なんじゃないかな。特にこれからの時代はそういった感覚が重要だ

と思いますし、実際に先ほど私、中山間ということをお智学園の中でも申し上げましたけれども、中山間の課題を解決していこうというときに必ずしも日本の国内だけのネットワークでそれを行うということでもなくて、直接海外に向けて例えばマーケットをつくっていくであるとか、あるいは海外の地域と連携するようなこともあるわけですし、これからますます外国人が日本にやってくることも含めても、本当に幅広く、こういった海外経験をすることは重要だと思うので、ぜひ、この推進を図るように皆様も御審議賜れば大変ありがたいなと思っております。

【小路座長】 ありがとうございます。知事御自身の体験談も含めまして、お話をいただきまして大変参考になりました。引き続き私どもの取組に対して御意見を賜ればと、こういうふうに思います。本日は大変、公務御多忙のところ、お話をいただきましてありがとうございます。

では湯崎知事については、これで退室をさせていただきます。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

【湯崎知事】 ありがとうございます。

【小路座長】 ありがとうございます。

それでは、引き続きまして前回の留学経験、その中でも少し若手の意見も聞いてみたらどうかと、こんなお話もいただきまして、本日、滋賀大学の渡辺太陽さん、会場にお越しをいただきました。渡辺さんは、トビタテ！留学JAPANでタンザニアに留学をされたと伺いました。渡辺さんから、これも10分強になりますけど、お話をいただければと思いますので、それでは渡辺さん、よろしくお願いいたします。

【渡辺氏】 皆さん、こんにちは。滋賀大学経済学部ファイナンス学科4回生の渡辺太陽です。太陽の情熱で世界を照らすということで、発表のほう、進んでいきます。よろしくお願いいたします。

まず、私が何者であるのかというのを簡単に紹介しようと思います。僕、何か顔が東南アジアとかのハーフかと言われるんですが、生粋の日本男児です。幼少期は相撲少年で、大阪のチャンピオンにもなりました。中高は砲丸投げに打ち込んで、1年間砲丸投げでニュージーランドに留学していました。また、大学ではラグーマン、そして、大学ではサークルを立ち上げて、琵琶湖の環境を守るカップのお兄さんとしても活動していました。昨年はタンザニアに太陽光発電事業のインターンシップに取組に行きました。このようにいろんな顔を持つんですが、ずばり一言で自分がどんな人間かを表すと、鎖につないで、檻

に閉じ込めておかなければならない人と大学の尊敬する教授から言われています。これは決して危ない意味ではなくて、好奇心が旺盛で気がついたら新しいことに取り組んでいる、そういった人柄をあらわしています。

こういった前向きに何でもかんでも取り組んでいこうと思うようになったのは、この数年、この二、三年ぐらいです。以前はすごく自信がなかったです。ルールに敷かれた人生をただただ歩んでいました。というのも自分の家庭環境が厳しくて、すごく全て親の言うとおりにやったりとか、中学受験をしていい大学に行きなさい、医者になったら一生安泰するぞ、あと、もうゲーム、漫画は禁止だという感じで、すごく親に従順で、かつ自分にも自信がない、そんな子供でした。

それが大きく変わったのが、そんな自分に人生の転機が訪れました。それが2回の留学経験です。1つ目がニュージーランドでの砲丸投げ留学です。自分が大好きだった砲丸投げをもっと打ち込もうと思ってニュージーランドに1年間、高校を休学して渡航しました。2つ目が、タンザニアでの太陽光発電事業のインターンシップです。この2回の留学経験を通じて僕の人生が大きく変わりました。

そもそも、僕が漠然と海外に興味を持ったきっかけがありまして、それは高校が提供しているプログラムで海外に行ったことでした。高校1年生時にイギリスの語学研修に行き、そして韓国の姉妹校への短期留学も経験しました。まず一番驚いたのが、僕、身長が185センチあるんですが、イギリスに行ったときに自分よりも大きな人がたくさんいて、まずびっくりしました。それ以外にも肌の色が違ったりとか、考えも違うと。世界はこんなにも広くて大きいのかと感動しました。

そうこうしているうちに高校3年生になって、何を思ったのか、ニュージーランドに砲丸投げで留学しようと考え出しました。僕が世界では主流の技術、回転投法に挑戦したいと、そのために憧れの世界王者のTom Walsh選手がいるニュージーランドを渡航する国として選びました。渡航を考えたのが高校3年生の5月、6月でした。そういうのがあって、担任の先生や高校の先生からは猛反対されました。前代未聞やと。今、行かなくても1年後には大学生で留学もできるんじゃないか、砲丸投げで留学しに行ってどうするんやと言われたんですが、真剣に自分の熱意を伝えて先生も真剣に腹を割って話していただいて、その中で留学してからどういった人生を歩いていくのか、どんなキャリアプランを考えていくのかというのを本当につき合わせて話していく中で留学が実現してきました。

現地では世界チャンピオン、僕が尊敬している選手の元母校に通いながら、元コーチの

もとで師事して練習に励んでいました。そのクラブチームで出会った言葉が僕の人生を大きく変えました。その言葉が、Don't be afraid to fail, Be afraid not to try. ですね。失敗を恐れるな、挑戦しないことを恐れろという言葉がクラブチームの看板に掲げられていて、この言葉に僕はすごく影響されました。実際に現地でも、ニュージーランドの生活でも実践してきました。

ニュージーランドの日々では世界最強のラグビーにも挑戦したり、また、週末は山の奥に行ってフライフィッシングやハンティングをしたりと生活していました。一方で差別に遭うこともあって、5人に急に襲われて1対5で戦ったりと、すごい大変なことあったんですが日々楽しく生活していました。

そんなこんなで自然と常に挑戦者であれ、そういった自分の人生のモットーが出来上がってきて大学生活、意気込んで進んでいくわけですが、何者になったのか。カップパになりました。大学から滋賀県に移り住んで琵琶湖の自然に魅了される一方で、琵琶湖の環境とか自然を少しでも伝える活動をしたいと思ってサークルを立ち上げました。地域の伝説であったカップパとか、琵琶湖の環境問題とかという盛り込んだ紙芝居を一から製作して、サークルメンバーと一緒に制作して行きました。それを地域の学童とか子育てイベントで読み聞かせ活動を行って、子供に環境問題を考えるようなきっかけづくりを行って行きました。

琵琶湖の環境とか、そういった問題以外にも少し視野を大きくして、日本とか世界の環境とか脱炭素の問題を勉強したいと思って世界の脱炭素を学ぶ、そういう勉強会に半年間ほど参加しました。そこで日本の原子力発電所とか幾つかのエネルギー施設を回ったり、あと、自分なりに世界のエネルギー問題を調べていく中で、特にアフリカ地域で電気がつながない地域が多くて、それが原因で貧困とか経済格差が生じているといったことを学びました。

そこで人々の生活を支えるエネルギーを用いてアフリカの社会問題に取り組んでいこうと考えて、アフリカへの渡航を決意しました。その際、利用したのが官民協働でやられているトビタテ！留学JAPANという奨学金に応募して、選抜していただいて渡航が実現しました。

現地では、アフリカのエネルギー問題に取り組んでおられる企業でインターンシップに取り組んでいました。もう人口2,000人ほどの農村地域でして、本当に農家の方がたくさん、農家の方が多かったんですが、お金もなかったり土地もなかったりで本当にぎりぎりの自

分の家族を養う分ぐらいの農作物しか作ってなくて、そういう小規模農家が多かったです。そういった小規模農家の所得向上を図る太陽光発電事業というのを取り組んでやっていました。実際に太陽光パネルを設置して、電気につながったときの皆さんのこういった写真のように喜んでる姿というのは、今でも鮮明に覚えています。

そして、それ以外にも太陽光パネルでより電気をつないでいこうと思って、ほかの地域にもいろいろ営業活動を行っていきました。たまたま地域の街角のスーパーで知り合った地域の魚卸売商人の方に、たまたま金の山のオーナーを紹介していただいて、それがつながりで本当に山奥やったんですが2時間、3時間バスを乗り継いで奥に行って話していくうちに、金の掘削時に大量のガソリンを消費していて毎日600リットルぐらい使っていると。それを太陽光パネルで代替して電力供給して、環境負荷も下がるし、かつコストも低減すると提案したところ、すごく喜んでもらえて太陽光パネルの設置が決まりました。実際に今年の9月か10月ぐらいに現地で設置の工事を進めるらしくて、結構大きな規模で案件が決まりました。本当にすごくうれしかったです。

そして、現地ではローマ・カトリック教会での居候生活をしていました。僕は全くの無宗教ですが、現地に溶け込んで現地の文化を学びたいと思って家に住まわせてもらいました。現地の神父さん2人と見習さん2人と一緒に生活していく中で、一緒に礼拝にも参加していく中で宗教が現地社会に及ぼす影響力というのをすごく体感したりとか、あと、小規模農家の方が貧しいけど元気いっぱい生活しておられる、たくましさを感じました。

また、右側の写真にあるんですが、現地のすごくおなかをすかせた子供がたくさんいたので、現地の揚げパンに着目、注目して、あと、日本の知名度も上げようと思ってジャパニーズケーキと銘を打って、日本のサーターアンダギーのお菓子を作って街角で販売とか、配ったりとかというのもやっていました。

このように僕自身がアフリカに行ってみて、電気がなかったりお金もなかったりしますが、すごく元気いっぱい、たくましい人がたくさんおられて、そういう、日本もそうですけれども、そういった個人や社会が持つポテンシャルを最大限発揮できるような社会をつくっていったら、可能性が広がるような社会環境を少しでもよくしていこうと将来の展望を抱きまして、将来的にはエネルギーとか食とか農とか貧困削減、こういった問題に包括的に取り組めるJICAに進もうかなと思っていますところなんです。

私は留学を経て2つ得たことがあります。1つ目が、外の環境を知って、外の世界を知っ

て自分のポテンシャルに気がついて自分の進むべき道が見つかりました。2つ目が、自分が挑戦するフィールドが与えられました。本当に留学、2回のニュージーランドとタンザニアの経験を経て人生が大きく変わりました。

それを経て、国への要望としましては、第1に中高生を対象にした留学機会の創出をより一層行ってほしいです。僕は2回の留学を経て人生変わったんですが、振り返ってみると高校1年時に高校のプログラムで2回海外に行ったことがきっかけで、そういった決断ができたのかなと思っています。でも各高校が独自にそういったプログラムをつくるのは難しいと思うので、そういったことを国とか県とか、そういったところがより一層後押ししてアプローチして行ってほしいです。

第2に、自主的な挑戦を後押しする、そういった若者の志を後押しするような、そういう留学奨学金制度、例えば僕が利用したトビタテ！留学JAPANなどの奨学金の制度をより一層充実させていただいて、応援していただきたいなと思っています。本日はありがとうございました。(拍手)

【小路座長】 渡辺さん、ありがとうございました。大変アグレッシブな人生を築いていらっしゃるなということで大変感銘を受けました。せっかくこの場にもお越しいただきましたので、15分から20分弱ぐらいお時間をとらせていただいて、渡辺さんに御質問をしていただければと思います。3名から4名ぐらいの方、御質問のお時間をとらせていただきたいと思います。御質問のある方は挙手をいただいて、マイクをオンにさせていただいて御発言いただければと思います。いかがでしょうか。

日色さん、どうぞ。

【日色委員】 ありがとうございます。お伺いしたいのですが、最初の高校1年生のときに海外に行った経験が大きかったということで、今回いろんな海外に行った経験をもとにいろんな方にお話をされて、どうやって、まだ興味がない人に留学に興味を持ってもらったらいいんだろうって考えていて、何か興味がない人に興味を持ってもらうための渡辺さんなりの何か、やっていらっしゃるってありませんか。多分、今日の熱意であちこちに話していると、いろんな方が自分も行ってみたって多分おっしゃったと思うんですけど、その辺について何かありませんかね。

【渡辺氏】 ありがとうございます。まず、こういった熱意を持って、もっと周りに講演とかして、そういった人たちを増やしていきたいなっていうのを今のお話聞いて感じました。僕自身が高校のときがすごく影響力が大きかったなと今、振り返ると思っています、そ

のとき、何気なく高校のプログラムで提供されたもので海外に行ったことで海外に視野を向けていったので、それが高校1年時に高校の同級生160人中30人ぐらいがイギリスに行きました。そういう何気なく自然とみんなが行って、僕も行ってみようかという、イギリスか、楽しそうやんか、というところで行って見たんですが、そういった何気なく自然と行けるようなプログラムが高校の中にあったので、それは第一歩目の海外渡航としてはすごく行きやすかったのかなと思っています。そういう自然と海外に行けるような取組、そういったプログラムがあればいいのかなと思ったりしています。

【日色委員】 結構、同じ30人の方というのは、その後、また留学行かれた方も多いんですか。

【渡辺氏】 高校のときの話なのであまり分からないんですが、高校で行った30名の同期で、高校時に留学行った人は少ないと思うんですが、大学行ってから、どうでしょうかね、あまり分からないです。でも、何人かはその話を聞いています。

【日色委員】 ありがとうございます。

【小路座長】 よろしいですか。それでは、ほかにございますでしょうか。

それでは、正宗先生、どうぞ。

【正宗委員】 すいません。物すごく素敵な発表ありがとうございました。私がお伺いしてすごく印象を受けたのが、いろんなところに行かれて、特にニュージーランドとかアフリカとかで現地の方々と物すごく一緒に溶け込んで、そこでいろんな学びを得られたかと思いますが、それが次のことにつながるという感じで、現地の方々と一緒にコミュニケーションを取る秘訣というのが御自分なりには何か一つ、お考えはあるでしょうか。

【渡辺氏】 ありがとうございます。先ほど、そうですね、僕もアフリカに行く前にフィリピンにも行ってまして、フィリピンではジブニーと呼ばれるものがあるんですが、現地のジブニーのドライバーさんと仲よくなって、実際にジブニードライバーと一緒に仕事をしたりとかというふうに現地に溶け込んで現地の文化とかを学んでいく、知ることが僕はすごく大好きです。

タンザニアでもそういった形でやっていたんですが、秘訣としては、どうでしょうかね。まず、こういった現地に溶け込むというか、自分、この服装ですけれども実はタンザニアで地元のオーダーメイドで作ってもらいました。それとか、実際に現地の衣装を着たりとか、あと現地でもひげを生やしていたんですが、ひげをぼうぼうに生やしたりとかして、何かアジア人で外国人やけど、何か現地になじもうとしている、興味があるところはすご

く自分の姿勢で示していったりというのもしていきました。あと、もう取りあえず話しかけるとかして、興味がある、相手のことを知りたいんだよというところを伝えていくのは心がけていました。

【正宗委員】 別に英語力は高いわけではなくても、そういうことをすれば誰でもできるということですね。

【渡辺氏】 そうですね。そうです。全く英語力は全然なかったもので、ニュージーランドに行くときも英語なんかも勉強してなかったですし、取りあえず行ってみようと思って、思い立ったら行こうというので行ったので、特段そんなに英語は、何となくですね。

あと何か、タンザニアでしたら現地の方言とかがあったので、例えば、こんにちはというのにはマーゴナと言うんですけど、そういう方言の特殊な言語とか、ちょっとだけかいつまんで覚えてみてしゃべったら、何でこんなん、知ってるんや、と言われてたりとかしたので、そういったところでコミュニケーションを図っていきました。

【正宗委員】 ありがとうございます。

【小路座長】 ありがとうございます。ほかに皆さん、いかがでしょうか。

どうぞ、吉岡さん。

【吉岡委員】 大変貴重で楽しいお話、ありがとうございます。先ほどの日色委員のお話とある意味では裏側ですけれども、今、渡辺さんがお話しになった、渡辺さんみたいな方じゃない、つまり何となく海外には行ったほうがいいかなと思ながらも行かない人たちが、ある意味では多数派なわけですね。特に日本だと行かないと。そういう人たちは、何で行かないんだろうと渡辺さんから思うかということと、どういうきっかけ、きっかけは先ほどあった高校時代とか、場合によっては中学校か何か、外に出る仕組みみたいなものを作る、私もそのとおりだと思うんですけど、何でみんな、行かないんだろうと渡辺さんから見て思いますか。

【渡辺氏】 ありがとうございます。この会議に出るに当たって、自分の周りの友人にも提案をして話を聞いてみました。実際に高校のときとか留学してなかったりとか、大学になっても何だかんだ行っていないという友人とかが周りにいたので話、聞いてみたんですけど、実際に高校のときに、何となく関心はあったけど行かなかったみたいな感じが割と周りの意見でして。例えば、高校のときにそういったプログラムがあったのかって聞いたら、いや、覚えてないな、なかったなとかという人も多かったですし、そういう多分、全員何かしらで海外に関心を持つきっかけって英語を学んだりとかというのがあると

思うんですけども、実際に渡航をしてまで海外に行こうという踏み込むチャンス、機会がないのかなと。

高校生までって割かし、親のもとで育っていくので、そういう受験があったり、何やかんやで一応あくまでも親のもとで育つので、なかなか、そういうふうなところに行くというのが結論できないのかなと感じました。そこでどうやったらいいのか。もちろん僕が思うには、そういった高校のときに何となく周りも行くから一緒に行こうみたいな形で、海外に行く機会があったりというプログラムがよりあってほしいなと思ったりですかね。そこら辺が一番、僕としても影響が大きかったのかなとは思っています。

【吉岡委員】 ありがとうございます。そういう意味では、最初の一步の仕組みみたいなのが重要だという感じですよ。きっかけをつくるという。私も海外に行って何かしようとかって目的を持っている人というのは、割と例えばトビタテなんかに応募してくるんですけども、その一步手前の人たちがある意味ですごく重要だし、数も多いので、その辺どうやって焦点を合わせたらいいいのかと、多分この会議でも考えていくことだろうと思うのです。どうもありがとうございました。

【渡辺氏】 そうですね。ありがとうございます。僕自身も海外に一步の初め、踏み出したおかげで次につながったので、そういう機会があったらなど。1回踏み出してしまえば次、簡単に海外に行けるとは思うので、そこら辺だと思っています。

【吉岡委員】 ありがとうございます。

【渡辺氏】 ありがとうございます。

【小路座長】 それでは私からもよろしいですか。本来あまり私が質問させていただきちゃいけないんですけど、大変刺激を受けたんで。これだけグローバル経験をされて、大学で今、ファイナンス学科ということで、多分、アカウンティングファイナンス、財務の勉強されているんですかね。

【渡辺氏】 そうです。

【小路座長】 財務の勉強をされようと思ったきっかけ、あるいは目的というのを聞かせていただきたいのが一つと、もう一つは、これだけの経験をされて、渡辺さん自身が例えば10年後の自分の姿ってどんな姿をイメージしているのか、そのことを聞かせていただければありがたいなど、二つです。

【渡辺氏】 ありがとうございます。財務に関してはファイナンスとかでもファイナンス学科で財務経理とか、そういった企業価値評価とか、そういったものを勉強してはいる

んですが、何となく経済学部には僕が入ってしまったわけですが、ニュージーランドから帰ってきて大学受験、始まって、受験も失敗して浪人しています。なかなか、いろいろあつてで入ったんですが、何か、何となく環境とか関心を持っていく中で、そういうSDGsとか、いろんな環境価値とかというところで、経済学部生でもそういったファイナンスとか、要は仕組みづくりとかで少し世界にインパクトを与えられるのかなとかというところで、財務とかファイナンス系に関心を持ちました。そこでファイナンス学科に入ったのかなっていうのが一つありました。

10年後ですか。10年後としては正直なところ、まだ僕、人生をかけて何をしたいのかとあったところはまだまだあまり明確には定まってなくて、ただ、何となく可能性がつぶされるような環境というのを少しでもよくしていきたいな、そのためにJICAに入って僕が活動していきたいなと思っているんですが、10年後だと僕は35歳なので、そうですね。10年後、どこかまた、別のアフリカでもどこでもいいんですが、どこかの地域に行って現地社会、政府とかじゃなくても現地のそういったたくましく生活しておられる姿の現地の方と仲よくなって、何か、その方が少しでもよかったねとか、笑顔になってくれるようなプロジェクトなり、何かをやっていきたいなとは思っているところですが。

【小路座長】 ありがとうございます。それでは、もう一方ぐらいいらっしゃったら御質問受けたいと思いますが、いかがでしょうか。

廣津留さん、どうぞ。

【廣津留委員】 ありがとうございます。素晴らしいプレゼンテーションありがとうございました。渡辺さんの話を聞いていると、恐らく海外にもし出なかったとしても国内でも、その行動力でいろいろなチャレンジをしていらっしゃったんじゃないかなと思うんですけども、リスクをとって行動する原動力みたいなものは何でしょうか。お話を聞いていると恐らく、お人柄がすごくあって、もうそういう性格なのか、生い立ちなのか、それは生まれつきなものなのか、それとも身につくものだと思いますか。

【渡辺氏】 ありがとうございます。そうですね。もう僕も何か鎖につないで檻に閉じ込めておかなければならないと教授から言われていて、それぐらい好奇心旺盛で活発な人間と言われています。でも、ですが僕自身、18歳まで、ニュージーランドに行くまではすごく自信がなかったり、自分で発言しなかったり、あまり前に踏み出していけないような人間でした。大分、人目を伺ったりとか自信がなくて、もう全部親の言うとおりで勉強だけかりかりして、あと部活するぐらいの生活やったんで、そんな、こんなに活発に動ける

ような人間ではなかったもので、ニュージーランドに行って自分の人生が変わったなど僕は思っているのですが、ターニングポイントがニュージーランドと思っています。

なので、でも元からそういった、たまに爆発するようなエネルギーとか、そういった部分は高校生のときとか中学校のときでも感じる部分があったので、元から持っていたけど、それを引き出してくれたのがニュージーランドかなと思っています。あと、幼少期が結構、自分の活発なエネルギーを抑え込んでいたので、それが大学、ニュージーランドに入ってから爆発したという、自由への渴望というのか、いうのがあったのかなと思っています。

【廣津留委員】 よく分かりました。ありがとうございます。

【小路座長】 ありがとうございます。渡辺さんは、今日はこの会議に最後まで御参加いただけるんですね。

【渡辺氏】 はい。

【小路座長】 御参加をいただけますので、場合によっては後ほど、皆さんの御意見をいただく場に渡辺さんに御質問していただいても結構かと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、渡辺さんのお話についてはこれで終了させていただきます。ありがとうございました。

【渡辺氏】 ありがとうございます。(拍手)

【小路座長】 それでは、引き続きまして議題に入っていきたいと思っております。

まず、次は前回第1回目の議論を踏まえまして、これからの新たな留学の姿というか、留学の望ましい姿について、引き続き今日議論を深めていきたいと思っております。

その議論を深める前に、前回の会議について少し振り返りをしたいと思っておりますので、振り返りにつきまして資料の説明を事務局からお願いいたします。

【下岡留学生交流室長】 資料3に、前回の主な御意見を内容ごとにくくってまとめております。まず1番目に、未来2040年の日本社会がどうなっているかということに関する御意見でございますけれども、世界の中で日本のマーケットの相対的サイズが確実に低下する中で日本の影響力をどのように維持していくのか。また、日本社会における外国人比率、相当高まっていくであろうこと、また、日本の人材の空洞化が今後さらに進み、魅力を上げないと高度人材が日本に来なくなるのではないかという御意見がございました。

また次に、2040年からのバックキャストिंगをしての御意見でございますけれども、日本人学生がグローバルコンピテンシーを身につけ、新たな将来を牽引するグローバルリ

リーダーとなることを期待したいということ。また、日本の国際的な影響力の維持、また、日本国内の共生社会のよりよい実現の観点から、海外留学をする者を増やすことが重要であるという御意見。また、世界のリーダーと共創し、イノベーションを起こせる人材を育成することが必要であるという御意見。また、正解があることを前提とする教育はしっかり見直すべきであるという御意見。また、優れた人材に海外から来てもらうためにも、国内に海外経験を持つ人材が数多くいることが必要であるということ。また、エネルギーをはじめ、あらゆるものを海外に依存している我が国は資源が人しかないということ。また、世界を目指す人が少ないことが、スタートアップのエコシステムが小規模になって、世界展開するスタートアップがなかなか出ないことの要因にもなっているのではないかと聞いた御意見がございました。

また、これらを踏まえ、取り組むべき解決策でございますけれども、マインドセットや機運醸成ということに関する御意見ですが、留学は自分への投資である意識を持たせることや、自分の未来像をよりグローバルに考えさせることが必要であるという御意見。それから次のページにまいりまして、留学経験者が自らの経験をシェアできるフォーラムがあると、よい循環ができるのではないかとという御意見。それから親からの影響について留意する必要があるということ、特に高校・中学段階では保護者が安心して生徒を送り出せることが必要であるのではないかとという御意見がございました。

次に、経済支援に関することでございますけれども、国費の奨学金70数億円というのは2桁間違っているのです、しっかり国費で出すべきであるという御意見。それから給付型奨学金はターゲットを明確にすべきであって、学部、修士、博士などの段階ごとのインセンティブ設計が必要であるという御意見。また、欧米以外の地域へのシフトも重要であるという御意見。また、若い世代の最優秀な層を世界のリーダーと交わるような長期の留学をさせる留学が必要であるという御意見。その際に、帰国を義務づけるということはずべきでないという御意見もございました。また、大学の成績のトップ入学者に限って世界のトップ大学にも留学できるような、勲章のような奨学金制度を創設してはどうかということ。また、自費で留学できる方への促進として税制措置も検討すべきである御意見もございました。

次に、環境整備に関することでございます。初等中等教育段階では、高校・中学段階から外国人と接したり、短期でも海外経験を増やすべきであるという御意見、また、特に地方部では情報が少ないことや留学費用が課題でありますので、行政や社会でしっかりカバ

一していくことが必要であるという御意見。また、高校・中学段階でも比較的取り組みやすいオンラインでの国際交流ができるよう、相手を見つけることができるよう、行政がしっかりサポートしなければならないという御意見。

次のページにまいりまして、大学段階でございますけれども、世界に優秀な大学院生等を送り出しても空洞化してしまうわけでは決してなく、研究室全体では博士課程まで残る人が増えたり、研究室が活発になったというような御意見。また、留学すると1年待たないと卒業できないであるとか、院試のために留学できないといったことのないようにすべきであるということ。また、大学に入ったら海外に行くのが当然であるという、そういったような仕組みをつくる大学に対して支援していく方法が重要であるということ。また、海外からの学生との交流機会等の拡充や英語による講義の拡充が必要であるということ。また、学生に関心が高いスタートアップのグローバル展開を考える中で、アジアやアフリカに目を向けさせて、ひいては海外への関心を喚起するというのも一つのやり方であるという御意見。また、国内大学の一層の国際化を進め、留学生と日本人学生が学業や生活をともにし、それにより日本人学生の海外への関心を喚起する循環をつくることが重要であるという御意見。それから、大学院レベルのダブルディグリー等の機会の拡大が効果的ではないかという御意見。また、海外大学との交渉できる能力の高い職員の育成・増員が必要、極めて重要であるという御意見。また、日本の大学で簡単に学位が取れてしまうことも日本人学生にとって留学のバリアになっているのではないかという御意見がございました。

産業界に関しましては通年採用、また、博士号取得者の採用を進めるべきであるという御意見。また、留学すると採用活動に乗り遅れてしまうということがないように、政府や産業界を含めた社会全体で取り組むべきであるという御意見。また、留学等のチャレンジをしたことを評価する会社が増えれば、空気感が変わっていくのではないかという御意見がございました。

以上でございます。

【小路座長】 ありがとうございます。本日御欠席の伊藤さんと田中さんから意見をペーパーで頂いております。お二人の意見の紹介と、それから引き続いて資料4も含めまして、再度事務局から御説明をお願いいたします。

【佐藤参事官】 本日御欠席されています伊藤委員から、まずは一般的な御意見をいただいておりますので、そちらを読み上げる形で御紹介したいと思います。読み上げさせて

いただきます。

『日本の初等教育, 中等教育, 高等教育のすべての段階において留学生を積極的に受け入れて多様性を高めること, そして日本から一人でも多くの学生を世界に送り出すことは, 日本として, 日本そして世界の発展に寄与するために極めて重要です。その観点から実施すべき必要なことは, 学生目線でのデジタル化です。学習面においては, 「学習歴等のデジタル化の推進」であり, これを日米両言語に対応する形で整備する必要があります。海外の大学の多くは学習歴に関するデジタル化が整備されてきていますが, 日本では学位の真正性の証明や留学生の学位の証明に困難をきたしています。これでは世界からの留学生が増えません。社会人学生を受け入れるためにも同様のデジタル化が必要となります。

また, 円安等に基づく高額な留学費用が足かせとなって, 日本から世界への留学ができない学生, ちゅうちょする学生が大勢います。しかし, 国の財源は限られています。その財源を有効に活用するためにも, 個々人のニーズに応じてどれだけの補助が必要かをデジタル化とAI等の活用によって機械的に割り出す必要があります。学生が扶養家族の場合には, その世帯収入等を, 例えば日本学生支援機構が一元的に把握することによって, 個々人が必要とする最低限の補助を「ほぼ自動的に」受け取れるようにするマイナンバー制度ベースのデジタル化も求められます。

コロナ禍での補助でも, 学費の補助でも, 留学の補助でも, これからの時代は機関補助から個人補助に移っていくべきです。困っている人だけに援助が届き, 困っていない人は援助しないメリハリがないと, 本当に必要な人への支援が行き渡りません。』

以上, まず伊藤委員からの御意見でございました。

続いて, 資料4の御説明をさせていただきながら, こちらについてもまた別途, 伊藤委員, 田中委員から御意見をいただいておりますので, まずは資料の御説明からさせていただきたいと思います。

こちらは資料4, 留学・経済的支援の状況についてです。前回の御議論の中で, それぞれ論点がいろいろあるので, 段階別の分析や目標設定, 対策の検討が必要ではないかということがございました。そこで, まず今, 現状のみをしっかりと整理させていただきました。左側, 博士課程から高校まで, それぞれ段階がございますけれども, その右にある数字とパーセンテージについては, これは分母が, それぞれの段階に在籍している日本国籍の方の数になります。分子が, その課程で日本の機関に在籍しながら留学した方の数とそのパーセンテージで表しています。例えば博士課程を御覧いただきますと, 5.7万人の日本人, 日

本国籍の方がいらっしゃって、そのうちある年に留学したのは0.37万人、6.4%ということになります。

ここで1点だけ注意していただきたいのは、タイトルの右側に「学位取得型を除く」と記しておりますけれども、直近の我々の把握しているデータでいきますと、大学に在籍して留学した方々というのは、ピークの2018年で11.5万人、最新の2022年、コロナ明けで復活している途中で5.8万人でございます。ここに表示させていただいている博士、修士、学士までのこの上の3つの3段階の合計が今、ピークのコロナ前、分かりやすくピークの11.5万人の数を記しております、別途日本の大学等には属さないで、直接留学される学位取得型の数4.1万人はここに含んでいません。

というのは海外の統計から4.1万人という数を出している関係で、段階別に数を我々は把握しようがないということで、これはあくまでも日本の大学等に在籍しながら留学している方の割合ということになります。したがって、博士でいくと6.4%、修士でいくと5.99%、学士課程レベルでいきますと3.21%の方々が留学していると。高校においては、1.43%の方が留学しているということになります。この留学には短期も含まれますので、例えば1か月未満のものも部分的には含まれております。

それに対して経済支援がどれぐらい準備されているのかというのはその右側でございます、国費においては、博士で0.5億、修士で5億、学部で49.4億、高校生で1億円というものが令和6年度の予算額で措置されているものになります。その括弧の中は、その予算額で支弁できる対象数をざっくりと表しているものになります。

「トビタテ！留学JAPAN」のほうも同じでございます、これは令和6年度の予算額を、採用されている人数ベースで案分しているものになりますけれども、これだけのものが支援されている中で、それぞれの段階でこれだけ今お示ししている数の留学している方々がいるということになります。

なお御参考までですけれども、国費で留学を支援している、奨学支援している方は、この協定派遣で11万5,000人、ピークのうち大体16%ぐらいになります。この6.4%、5.99%、3.21%という全員がこの奨学金を受け取れているわけではありません。大体8割ぐらいの方が自腹で行っているというデータもございますので、国費支援というのが一部の限定的なところに閉じているというのが現状でございます。

この資料4につきまして、伊藤委員と田中委員から御意見をいただいておりますので、こちらも読み上げさせていただきます。まずは伊藤委員からです。

『博士課程について、理系は給料が出る場合が多いことから、予算的な規模は限定的でよい可能性があるが、人文社会系ではそうではない場合が多いと想定されるどころ、手厚く支援する必要があるのではないか。

修士課程については、ビジネスや法学などのプロフェッショナルな分野は生涯賃金的なことや自身への投資であることも考えると、貸与型が中心でもよいかもしれない。ただ一方で、アカデミックな分野では手厚い支援が望ましい。受益者負担としての一定のリスクは取らせるべきであり、仮に大規模支援を実現できるのであれば、半分程度は貸与型でもよいのではないか。

学部から高校段階については、ファーストステップとしては大規模に展開することが望ましく、給付型を増やしていくべきである。ただし経済力のある家庭については本人負担があってもよい。』

こちらが伊藤委員からの御意見でございます。

続きまして、田中明彦委員からの御意見です。

『前回の発言で、海外留学について、高校、大学学部、大学院修士・博士などの段階別の分析と目標設定や対策形成が必要であることを指摘させていただいた。今回このデータを拝見していくつか感想を述べたい。

第1に、量的な拡大という観点で言うと、高校から大学学部での拡大はまだまだ進めなければいけないと思う。高校から大学学部にかけて、誰でも一度は海外体験をするという目標を立ててもよいのではないかと思う。その場合、期間としては最低1か月程度は必要であろう。また、派遣先はできる限り多様であることが望ましい。また、事務局作成の別の資料によれば、学部レベルでのいわゆる「理科系」の留学の比率が著しく低い。専門分野にかかわらず海外で経験をする必要がある。』

こちらは参考資料2の20ページにある資料のことですけれども、実は学部段階でいきますと、人文科学での留学が64%を占めているという実態がございます。

続きまして『第2に、大学院レベルの留学が極めて少ない。日本における大学院進学率が著しく低いことがその原因かもしれないが、それにしても絶対数があまりに少ない。ただ大学院レベルということであれば、月単位や学期単位の留学を増やして量を拡大するというのは、それほど意味はないのではないか。既に述べたように、短期・中期の留学は、高校・学部レベルで全てが経験していることが望ましい。

その上で、大学院レベルの留学は学位取得を目指したものを目標とすべきではないかと

思う。特に国が支援するという対象としては、それぞれの専門分野で世界最高水準の大学院での学位取得を目指す者にするという方針はあり得るのではないかと思う。世界ランキング上位大学における日本人の学位取得者数のデータがあれば共有していただけるとありがたい』と、こういうお話をいただいております。

それで最後のところで、世界大学ランキング上位における日本人の学位取得者数のデータがあれば望ましいという御指摘があったので、こちらの事務局で調べさせていただきました。これも口頭ですけれども御報告いたします。

今年の2月の数字ですけれども、スタンフォード大学に在籍している日本人の数は、学部が8名、大学院60名、合計68名です。ちなみにこのスタンフォードに68名日本人が在学しているんですけど、中国人の留学生の数は1,109名、韓国人の数は193名、これに比較して日本人が68名という数字でございました。

また、ハーバード大学ですけれども、学部20名で大学院が77名、計97名日本人が在籍していますけれども、これは同時期の中国人の数は1,214名、それから韓国人が217名という数になっております。

最後、コロンビア大学ですけれども、学部24名、修士が164名、計188名の日本人が在籍していますけれども、これは中国人が学部で351名で大学院が6,476名、6,827名の中国人が在籍しています。一方で韓国は159名と333名で、計489名の韓国人が在籍していらっしゃいます。日本人は、繰り返しますが188名です。

以上、あくまでもこれは各大学のサイト等から調べた数字になりますけれども、一つの御参考まで、田中委員からの御指摘についての御回答として御紹介させていただきました。

事務局から以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。前回、第1回目の会議では、本日の廣津留さんを含めまして、委員全員の皆様からこのフォーラムで議論すべき内容、あるいはどういった留学についての論点を話したらいいのかと、このようなこと、あるいはまた新たな留学の在り方ということについて様々な意見をいただきました。本日につきましても、先ほど第1回目の議論のポイントまとめを事務局から説明させていただきましたけれども、今日お二人のお話等々を踏まえまして、いま一度、本日につきましても、新たな留学の姿ということについて、いま一度広く御意見を本日はいただきたいと思っております。

時間は45分程度、6時ちょっと前に終了したいと思いますので、今日は全員ということじゃなくて結構でございますし、御意見のある方は挙手して御発言いただきたいと思っております。

ので、よろしくお願ひ申し上げます。もう幅広く自由に御発言いただければと思いますので、よろしくお願ひいたします。それでは、挙手をいただければと思いますけども、いかがでしょうか。それでは南場さん、どうぞ。

【南場委員】 この図ですけど、私としてはぜひ研究者、学位を取った上の研究者も入れていただきたいと思っています。日本からイノベーションを起こしていくというと、大学などの研究成果、シーズの社会実装というのは非常に重要になっていくわけですが、そのモメンタムを強化するためにも、ポスドクを中心とする研究者の留学というか赴任も強化していくべきだと思います。

日本の最大のイノベーションの足を引っ張っている要素の一つとして、産業界とアカデミアが隔絶されているという問題があると思います。日本では、院生が博士課程に進む際の教授面接に臨むときに、将来のキャリアのビジョンとして産業界に関心があると言うと落とされるからそれは言うなと言われるとよく聞きます。今日もそれが実態かどうかは分かりませんが。

それが、私が話を聞いたとある大学の研究者でスタンフォードに行ってPIをしている方は最初、スタンフォードの周りの同僚の研究者や教授たちがお金の話をすると、何でアカデミアにいてお金の汚い話をするんだと、最初は嫌悪感を覚えたというのですけれども、半年たったなら率先して社会実装の先頭に立ち、どうやってこのシーズを事業化するかということの重要性に気がついて、スタートアップコミュニティーにも出入りするようになり、ベンチャーキャピタルとも話をするようになりました。たった半年間でさま変わりしたのです。

私は、大学の研究者のマインドセットを大きく変えていく上で、海外への赴任というのが非常に大きなインパクトを持つと思っていますので、文科省の範疇かどうかですけれども、日本の研究者を海外に出すということをとことんやってほしいです。その一例として台湾ですけれども、台湾のポスドクフェローシッププログラムというのがあって、有望なポスドク研究者、研究員を1年間スタンフォードに派遣しています。

日本でも、国とか大学が、例えば米国政府やトップ大学と交渉して、このようなプログラムを導入する、そしてポスドクの海外派遣を増やすというのは非常に重要だと思います。現在恐らく年間500人前後がポスドクで海外派遣されていると思いますが、ポスドクは今1万3,000人ぐらいいると言われていいますので、もっと増やすべきです。

それから海外派遣研究者のうち、政府機関が資金を提供しているという人たちは55%にすぎないです。ここは海外派遣を希望しているにもかかわらず、財源の問題で実現しない

研究者が存在するのであれば非常にもったいないので、手厚く支援するべきだと思います。

それから、イノベーションというとスタートアップを通じてのイノベーションが最も有効だと信じていますが、ポスドクの話ではないですが、学生を起業メッカのような、起業のエコシステム、スタートアップのエコシステムが先端的になっている地域に留学させるというのは大きいインパクトがあります。例えばシンガポール国立大学のNOCプログラムでは、シリコンバレーなどの世界有数の企業拠点にあるスタートアップでインターンを行いながら、スタンフォード大学などの授業を受けて単位を取得するというプログラムをやっているのですけれども、3,000人ぐらいこのプログラムを経験した人たちが出ていますが、既に700社の起業が起こっています。

これは何も起業を目的とするものとか、起業しなさいと言っているわけではなく、自主的に起業するということなので、シンガポール国立大学の関係者は、こんなに効率のよい制度はないと言って喜んでいらしいです。ですから、ぜひ、そういったことを研究して、日本でも同様に、それ以上のプログラムをやってほしいと思います。

それから前回、私が、2桁間違っているのではないかと申し上げた国費留学ですが、もしかすると3桁間違えているかもしれないと思いました。前回、イノベーションリーダーを育成するのであれば優秀層を全員送ったらいいいじゃないかという話をしたのですけれども、優秀層に限らずとも希望者全員を送ろうということを考えてもいいのかと思います。

日本人の留学のための国費は73億円の負担ということですが、希望者が大体三十数%だそうなので、大学・大学院在学者の例えば3割を送るとすると1兆円ぐらいかかります。前提として年間500万としていたのですけれども、1,000万としても2兆円です。日本の公財政教育支出というのは対GDP比で3%で、OECDの平均の4.3%よりも1.3%も低いです。仮にこのように、粗い計算ですが、在学中に1回1年間1,000万円分留学させる、そして2兆円の国負担をすとしても、それでもOECDの平均には全く届かないわけです。

ですから、あまりけちけちしたことを言わないで、国費でしっかりと希望者を全部送り出すぐらいの大胆なところから議論を始めていただけたらいいなと思います。企業からの寄附に頼っている、企業も少し負担してくださいという話はあるのですけれども、私は、企業はグローバルでの競争に勝って、それで利益を上げて、たくさん税金を納めるというのが仕事だと思います。その税金を次の世代、次にグローバルで勝つ人材を生むために、次にたくさん税金を払う人を生むために、国は大胆に国費留学をさせるべきということで、企業と国の役割というのはすっきりと峻別して取り組むべき課題ではないかと思います。以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。御存じ南場さんは経営者でございまして、経営者の視点からということで御意見をいただきまして。特に研究者レベルでは、産業界とアカデミアとのつながりが希薄ではないのかと。また、ドクターレベルについては、場合によっては、人によってはあまり産業界に希望を出しても将来のキャリアプランができるかどうかと、こんな声もあるというふうに。確かに米国なんかの博士課程で学位取得しますと、55%から60%ぐらいが産業界へ進む。日本の場合は博士号を取っても3割強ぐらいしか産業界に進んでいないということで、各企業が博士課程へのキャリアプランの示し方とか処遇だとか、そういったことを示し得てない、また企業自身が、高度専門人材をどう活用するかということに対して若干関心が薄くて、それがアカデミアの人には魅力として映っていないと、そんなこともあろうかと思えます。

この辺は、経済の視点から、アカデミアとの関係ということで御意見をいただきまして、よろしかったら藤井総長、何か御意見ございますか。

【藤井委員】 御指名ですのでお話しさせていただきます。海外へ行くか行かないかに関係なく、ポスドクは一種の仕事ですし、欧米では多くは博士課程の学生が給料をもらいながら、研究を仕事としてやっている状況です。そのような形で海外に行くきっかけとして、例えば国費で、今は学振の海外特別研究員の制度などがあり、これが恐らく今500名とおっしゃったものだと思います。このような形で国費でサポートした人たちが、例えばトップスクールに行き、そこで研究に1年2年取り組む中で、今度は現地で直接雇用されていく、という展開も、例えばスタートアップにつながっていくという展開も、一つのキャリアの形としてはあり得ると思います。

その上で、博士課程に進学するまでの間、あるいは博士課程在籍中も、もう少し海外に目を向けてもらうことが大切です。博士課程の学生は本当にグローバルに競争していますので、研究について考えると、海外のトップスクールとしっかり関係を築いていくこと、つまり研究者間でしっかりグローバルに関係を構築して、そのネットワークの中で人がグローバルに動く環境をいかにつくるか、ということが重要だと思っています。

つまり、顔が見える関係を、世界のトップスクール内でしっかりつくることで、その関係性の中で人が動く環境をつくるということが、研究のためにも良い取組であり、そこからイノベーションを生み出していくということを考えても非常に重要な論点ではないかと思えますので、ぜひ、この人材育成のフレームの中でも議論できればと思います。

もう一点、イノベーションの観点で申し上げますと、先ほどNUSのOverseas Collegesのお話

がありましたが、大学に在籍しながら、一定期間、海外あるいは、国内でも良いのですが、グローバルな体験に加えて、イノベーションの現場を体験することも一つの形ではないかと思えます。

今日の渡辺さんのお話も、タンザニアで、エスタブリッシュした大企業ではない現地の太陽光発電事業に取り組む会社でインターンシップをされたということでした。色々なスタートアップが日本のみならずグローバルに展開していく中で、学生の皆さんが一定期間そこでインターンシップを行いながら、今はオンラインのシステムも整備されていますので、オンラインで授業も受け、休学や留年をせずに次のステップに進むことができる仕組みを築いていくことも、一つの考え方と思いました。NUSの場合はそういう形でやっていると思っています。

大事なことは、海外に行くという経験について、今は留学というコンテキストで語られています。スタートアップや海外企業でのインターンシップといった留学以外の経験や、そのような経験と留学を組み合わせた経験を積むこと自体が、その後の学生の皆さんのキャリアにおいて、新たにグローバルな目を開く意味でも非常に重要なことではないかと思えます。

いずれにしても、前回の会議から繰り返しの発言になりますが、教育や企業における採用、雇用の制度を含めて、様々な意味で時間的な多様性を許すことが必要です。高等教育の観点でも、雇用の環境という観点でも、海外での経験をプラスに捉えて、そこを積極的に後押しするような環境を私たち自身がつくっていかねばいけないと考えています。

【小路座長】 ありがとうございます。前川さんの前に、先ほど南場さんから、産業界にもたくさん留学に関する支援、経済的な支援という要請があるんです。当然産業界も、各企業もそういった支援を積極的にしていくということに併せまして、南場さんから、企業がまず利益を上げて、税金をたくさん払って、その税金を国費として、どう留学に充てていくかということも非常に重要だと、こんな御意見もいただきまして、この辺急に振りますけど、文科省の皆さんいかがでしょうか。違いますとはなかなかあれですけど。

【佐藤参事官】 参事官の佐藤です。ありがとうございます。いろんな御意見をありがとうございます。私どもとしては、ぜひ国の今、奨学金72億というところを、より拡大する形でやっていきたいという思いは当然にしてございます。先ほど申し上げたように、今実際に留学されている方々の、ならしても10%程度しか奨学金を受けていないという事実がございますので、より多くの若者を外に出していくために拡充していきたいという思いは

ございます。

ただ、一方で現実的な話を申し上げますと、国の財政というのも限界もありますし、いろんなバランスの中で決められていくものになりますので、私個人としましては、これまで進めてきた「トビタテ！留学JAPAN」みたいな、企業の応援というのは非常に大きな若者たちの背中を押すメッセージになっていますし、若者たちはエンプロイアビリティということで、非常に企業のほうを見ているということもございますので、ぜひ企業からも、引き続きいろんな形で御協力いただけるというのがより望ましい形なのかなと考えさせていただいております。

【小路座長】 ありがとうございます。急に振ってすみません。文科省の考え方はよく分かりました。ありがとうございました。

それでは、藤井さんからも貴重な意見をいただきまして、引き続きそれを踏まえまして、前川さんの挙手をいただいていますので、オンラインですけど、前川さん、どうぞ。

【前川委員】 失礼します。今お二方から御意見が出たのと、それから、今日発表というんですか、報告をいただいた湯崎氏と、それから、渡辺太陽さんの発表を踏まえて、中学・高校段階に視点を当てて意見を言わせていただきたいと思います。

渡辺さんからもありましたように、高校段階で、高校にそういうプログラムがあったと。そして、それがあったので、思い切って短期だけでも行ってみた。それが高校3年生のときのニュージーランドへの留学につながり、大学でもつながっていったということがあったと思います。この間も申し上げましたが、高校段階で裾野を広げるということは非常に大事なことだと思うんです。それが結局、大学・大学院になったときに、留学する学生を増やしていくことにつながる一つの要因だと思います。

そのためですが、先ほどもありましたように、例えば研究者同士の関係づくりというのは大学では必要ですが、高校段階で言いますと、安心して行ける、それから経済的な負担、この2つが大きな要素になると思います。安心して行けるということと言いますと、今日御発表いただいた広島県さんですとか私どもの京都府ですとか、各都道府県がいろんな留学プログラムを持っています。また、私立高校は、学校ごとにそれぞれのプログラムはお持ちですが、実際にはこれだけの多くのプログラムを共有すると、さらに子供たちが行きやすいデータになるのではないかと思うんです。

行き先、提携先、こういったことを見つけるのは非常に難しいです。各都道府県の教育委員会で努力していますけども、それには限界がありますし、私立高校さんにしても、一部の

姉妹校をお持ちのところ以外については、かなり相手を見つけるのは難しいと思います。そういった意味で、どこかの機関、例えばそれは国であったり、高校留学のプログラムのデータ化というのをぜひ一度御検討いただきたいと思います。

それからもう一つは経済的支援です。高校生の段階で、この間も申し上げたとおり、地方に行けば、留学の費用の負担というのはかなりハードルが高くなります。ですので、経済的に恵まれた方の留学への、例えば税制措置の支援、こういったことも一つですけれども、志を高く挑戦してみたいなと思っている若者たちを後押しするような経済的支援を、これは「トビタテ！留学JAPAN」もそうですし、国の国費での支援もそうですし、都道府県の支援もそうですし、後押ししていかないと裾野は広がらないかと感じています。

結局、若い時期に一度経験をして、そして大学・大学院のレベルで本格的に留学をする。こういったことが結局研究のレベルを押し上げたり、様々な起業家を生んだりということにつながって、最終的には国力を押し上げるということになるかと思っています。これが1点目です。

もう一つは、留学で、高校でも大学でもそうですけれども、その先の進路を考えて留学を留まるということがあります。高校生でしたら大学進学、大学生でしたら大学院進学であったり就職、ここに対するフォローアップが必要だと思っています。高校生でしたら留年したり、あるいは大学進学での1年間の学力のハンディキャップなんかを心配しますし、大学で、例えば推薦入試の審査項目、評価項目の中に海外経験を入れていただくとか、そういったことをさらに進めていただけると、高校生の留学してみようかなという気持ちを後押ししていただけるのではないかと思います。

以上2つのことを申し上げましたけれども、ぜひ一考いただければと思います。以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。裾野を広げるということと、それから、場合によっては大学の審査の中にも留学経験というものをに入れてみたらどうかと、こんな御意見をいただきまして。大学のほうに審査の一つに留学を入れるということ、こういった御意見に対しまして、Pezzottiさん、いかがでしょうか。

【Pezzotti委員】 ありがとうございます。今日はまず、広島県のすばらしい活動ということを初めて聞きまして、確かに一つ大事なポイントは、若いときから海外に行くチャンスを与えるということはすばらしいことであるということには分かりまして、ぜひほかの県にも同じような動きをすればいいかと思っております。

また、申し訳ないけれど、私はいつも同じことを言いますが、海外へ行くということは、何

しに行くかということ、今、前川さんも大事なポイントを言いましたけれども、行ってどうされるかということで、外人は何をしているのかと見に行くか、単位を取りに行くか、ダブルディグリー1つを獲得するように行くか、研究しに行くか、どういう内容で行くかということはずごく大事なポイントでありまして、行ったらどうかという、お任せするということが、そういうことじゃない。目的をつくってあげないと、整合性もつくってあげないと行かないんですよ。

何回も申し訳ない、前回は言いましたけれども、この教育システムの違いはかなり激しくて、日本では、限られた内容についてどれだけ覚えられているかということは評価されるわけです。これは入学試験もそうです。海外では論理的に、要するに論理をどれだけ動かして、新規性のあるものができるかということの評価されるわけです。この違いに、例えばいきなり行ってくださいと言って、向こうで試験しに行ってくださいと言われても、日本人学生は留年するという可能性が高いし、戻ってきて、そういう経験は使えないという可能性もありますし、何しに行くかということをもって、例えばお金を与えても、チャンスを与えても行きたいということは思いません。

したがって、その整合性というのは、私はあまり極端なことは言いたくはないんですけれども、皆さん御存じのとおり、日本の歴史の中では、1871年あたりだったと思うんですけれども、岩倉使節団が海外に何しに行っているかというのは、どうやって勉強しているのかというのを見に行ったわけですね。だから今回、もちろん向こうも同じことは今回やってくると思いますし、私は、例えば自分の国から学長たちがたくさん日本に来て、日本のシステムを勉強しに来るということは、もう9月にはその事実はあるということですから、向こうも知りたいという気持ちは間違いなくあるんです。

ただ、日本側からも、海外側からも、どうやってシステムを合わせていくかということ、要するに1年間行ったら、その後留年にはなりませんよということで、試験はクリアできるようにするというので、この論理的思考にどうやって日本のシステムを持っていくかということは考えなければならないという問題点を外して、お金を与えましょうか、見るチャンスを与えましょうかということと言っても、ものが足りないということは私は思います。

だから抜本的に、基本的にどうやって西洋のシステムと日本のシステムを合わせられるかということ、我々は考える責任があるということは、ぜひ覚えてもらいたいですけれども。もちろん今日はもう一つすばらしい例がありまして、渡辺さんがすばらしい経験をなされたということはみんな驚いていると思うんですけども、ただ、渡辺さんは例外です。

考えてみてください。平均の人間というのは日本ではそういうことはしない。例外でやるというポジティブなことですけれども、渡辺さんは渡辺さんのキャッシュ口座はどういうパラメーターで評価されているかということは考えてもらいたいですね。

まず、IQということだけではないと思うんです。EQというものが、このコミュニケーションスキルというのはかなり優れています。それともう一つ優れているのは、AQですね。Adaptability Quotientという、彼はどこへ行っても、そのとおりになれるようになるんですよね。これはすごいことであって、要するに柔軟性であるとか、問題解決スキルとか、それと勇気とか、回復力とか好奇心、こういうものは日本のシステムの中で全く評価されていません。だから、一番レベルの高い大学に入ってきている学生たちは、そういう評価はゼロであると。要するに、IQがどれだけあるか、エクセルファイルをどれだけ覚えられるかということ、そのみでランキングを決めてしまう。

そういうことをしながら、その後は全然関係ない、そこで勝ち切って、そういうシステムでトップになった人材は、突然、そういう勝ち切ったことを諦めて海外へ行くということはまずないわけです。要するに、もうこれで私はこういう線路でいくということはもう決めているわけですから、一番いい人材にはそういう途中から違うことをやりましょうかということにはなりません。したがって、その整合性をつくってあげないとできません。

だから、渡辺さんの経験はすばらしいと思うし、インスパイアすると思うんですけれども、ただ、そういう、あなたはAQは高いとか、EQが高いということがあるから、例えば面接で評価するとか、そういう筆記試験のみで評価するんじゃないくて、どれだけのプロパティがあるかという。要するに大学でリクルートする段階で、いろんなタイプの人間は異なる賢さを取ってくるということはやらなければなりません。そうでないと、いきなり海外へ行きなさいと言われても、お断りであるということとは当たり前だと思います。

したがって、我々の、もちろん経済的なサポートをするということは大事でありますし、子供のときから、海外ではどういう暮らし方をするとか、どういうものであるかということ、は勇気を出すように経験させる、体験させるというのは大事であるけれども、それよりも一番大切なのは、教育システムの整合性であるということとは私自身が考えています。

日本に来たときに思い出して、私はローマ大学優等卒業だよと言って、分かった、まずラボの掃除から始めてくださいと言われたときはかなりショックでしょう。要するに、具体的におまえは何ができるかという、優等卒業であろうがそうでなかろうが、取りあえず我々のやり方で何ができるかということを見せてくれということをお願いするのは当たり前で

あるということは、私が気がついたことであるということです。

向こうへ行ったら、私はもう全部素晴らしい大学に入っていますよ、頭の中に歴史であるか、数学であるか、物理であるか全部入っていますよということ、そうですか、これから自分は何するかという新しいアイデアを出せますかということは何もしゃべれなくなると評価されません。だから、お互いさまでどうするかということは、本当に申し訳ないけども、150年後の岩倉使節団第2号をつくっていただきたいと文科省にお願いしたいと思います。以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。多方面にわたってお話をいただきました。おっしゃるように、確かにまず自らが留学するに当たっては、目的が何なのかということをも自分自身が明確にして留学に臨んでいかなければいけないと。これは私も、おっしゃるとおりであるかと。その辺が希薄で、漠然と留学に行くという層もひよっとしたら多いのかかと改めて感じました。

それから、日本独特の暗黙知というのは通用しなくて、海外ではロジカルシンキング、論理的にコミュニケーションを取っていかなければ学ぶことも学べないという御指摘はおっしゃるとおりだと思います。それとIQ, EQを含めて、アダプタビリティというようなところ、この辺も非常に重要だというような御指摘をいただいたと思います。ありがとうございました。大変貴重な意見で参考になりました。

それでは、ほかにございますでしょうか。正宗さん、どうぞ。

【正宗委員】 どうもありがとうございます。ほかの先生方も非常に大事なこともおっしゃってきているんですけども、私も一つ渡辺さんのプレゼンをお聞きして、非常に感銘を受けて痛感もいたしました。自分も海外に行って、そのような経験もしております。そこで一つ、我々が留学に関して語るストーリーは何なのかと。みんなの頭の中で、中学校、高校のときからでも、留学というのは、海外に行くことは何なのかということについて、その意義、その目的、先ほどの先生がおっしゃっていたように、何のためにですかと。

そこで結局、私が得たキーワードとしては、curiosityであるとか、passionとか、社会に貢献するとか、グローバル問題を解決していくとか、そういったことだったんですけども、最後に非常にじっくりきましたのが、渡辺さんがおっしゃった、自分のこれから進むべき道、あるいは自分のpassionがどのような分野にあって、自分が取り組むべきことは何か、これは海外に行って、初めて世界から日本を外から見て、分かってきたこと、あるいは制限されていない環境に行って人が変わる、そういったことを考えますと、留学というのは、ただの

堅いアカデミックなことではなく、その人の人としての成長につながるものであることを、一つストーリーとして我々は語るべきだと思いますし、みんなの心の中で、新しい可能性を見つきたいのならば、それが海外に行きたいというようなモチベーションにつながるような仕組みもつくっていくべきかと思います。

そこで、結局ほかの方々がおっしゃっている、自分がこれをやりたいから海外に行きますという、その支援制度をつくることと、あとは、先ほどほかの先生からの指摘がありました通り、スタンフォード、ハーバード、そういったトップ大学で日本人のいかに少ない数字からしてみても、ほかの国と違って海外の大学に親がお金を一生懸命ためて行かせることも日本では全く評価されていないことは分かりますが、これも一つの海外に行くこと自体の価値、そういったストーリーを我々はもっといろんな形で経験談を通じて語っていくべきだと私は痛感いたしました。私からは以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。改めて海外から自分と、また日本の社会を見るということは非常に重要で、今の正宗さんの言葉を聞くと、留学というのは自分自身と自分の将来、あるいは日本の社会の将来を映す、格好いい言い方をすると合わせ鏡みたいなものにもなるのかなというような感じを感想としていただきました。ありがとうございます。

それでは、大槻さん、手を挙げていらっしゃいますので、大槻さん、お願いいたします。

【大槻委員】 ありがとうございます。すごくいろんなお話を伺って、私も刺激を受けたんですけども、今回のお話で、さっきも日本人がすごく大学で少ないお話とかも受けて、大胆に変えていかないと、じわじわとした、ちょっとだけお金を増やしていきましょうとか、姉妹校を増やしましょうみたいな施策を1個ずつちょっとずつやっても、仮説検証にもならず、ちょっとだけ増えたよねみたいな形になってしまいそうだなと思っていて。

例えば本当に教育システムを変えるとかはすごく難しい、それこそ大胆な、変えることにはなると思うんですけど、姉妹校を倍に増やそうとか、何かそういう仕組みみたいなところをちゃんと仮説を立てて、今の一番の肝はどこにあるのかというところで仮説検証していかないと変わっていかないなというのは、改めて日本人の留学の少なさを聞いて感じました。

もちろん教育システムに関して、私もすごく共感することがあって、高校時代に自分も留学を考えても、学年が一つ絶対に落ちてしまうというのはあったので、もちろん姉妹校に行くと、ちゃんと単位が取れる制度をつくったりとか、多感な時期に一つ学年を落とすというのはすごいリスクに思えてやれないなとすごく感じるんです。なので、大学に入ってから

浪人生がいたりとか、学年が落ちるといのはまだまだ開けているかと思うんですけど、自分の10年前ぐらいの話かもしれないですけど、確実に、学年を落ちた先輩がいたんですけど、すごく目立っていたというか。もちろん最終的にはなじめるんですけど、そこはすごく人数も少ないですし、そこは教育で姉妹校を増やししながら、ほかの姉妹校でも単位が取れる仕組みみたいなのも全然できるんじゃないかと思っています。

今語られていないなという話で、中高時代の話でいくと、手段寄りにはなってしまうんですけども、日本人の英語力の低さみたいなところはまだまだ課題かと思っています。私自身も留学したときに英語が全然話せず、留学したりホームステイを受け入れたりみたいなところをして、英語力を上げていったというところはあるとはいえ、そういう外に出やすい人は英語力がない中でもチャレンジしていったりとか、そこまでにどう追いつかせるかというところを考えるとと思うんですけど、日本人の性格的なところで言っても、もともとの英語力が低いところからチャレンジを諦める人がすごく多いんじゃないかと思っています。

なので、中学だったりとか高校の段階も、小学校の段階もそうですけれども、もっと英語に触れる機会だったりとか、英語で学び、もちろん英語を学ぶ機会もそうだと思うんですけど、英会話として英語で学ぶ機会だったりとか、そういうのをより積極的に時間として増やしていくというところも大事じゃないかと思いました。

英語を学ぶことによって、英語で当たり前に関わることによって、世界が広がると言いますか、英語での情報と日本の情報だったりということでも違って、また、外に憧れを持ったりとか、大学時代に留学してみたいな、みたいなのも増えていくんじゃないかなと思っています。英語の学びみたいなのもまたどんどん論点として上がったらいんじゃないかと感じました。以上になります。

【小路座長】 ありがとうございます。それでは、時間も迫ってまいりまして、あとお一方ぐらい御意見をいただければと思いますけども、いかがでしょうか。

【渡辺氏】 そんな大したことは言えないですけど、今のお話を聞いて、僕自身も高校のとき1年休学して、最後半年間から1年間ほど1個下の代と生活したので、行く前はあまり感じていなかったんですけど、いざ帰ってくると、同回生は全員卒業していて、過ごしづらさとか、どうやって合わせていこうかなんてというのは、すごく苦労しました。

僕は今、大学4回生ですけど、25歳で3年差があります。高校1年休学、浪人、大学の1年間休学で3年下がって、周りに浪人生も多いんですけど、大体2歳下、3歳下とかが多くて、結構そういう、大学は結構多様性があるので、全然苦労はしていないんですけど、就活のとき

も、あと1年もし海外に行ってしまったら、もう新卒採用してもらえないかなとか、ぎりぎり3年だったら新卒採用で取ってもらえるかなという不安もあったり、就活しなくてもいいかなと思ったんですけど、今がラストチャンスかなと思って就活したというのもありました。とか、そういう先ほどお話のあった時間的な多様性とかというのはすごく感じました。そういうのが受け入れられる社会になったらいいなと思ったり。

あと、目的も大事ですけど、何となく海外に漠然として行ったことに、目的を持つには何かきっかけが必要なので、何となく漠然とした感じで行くというのも、初めは中高生とかだったらそういうのもいいのかなと。もちろん高校生後半とか大学生になってからは、目的を持って海外に行つてほしいですけど、漠然とした興味・関心でもいいんですけど、そんなところからも海外に行くというのがあってもいいのかなとは。目的が必ずしもなくても、初めは、一歩目はいいのかなと思ったりはしました。

あと、そういう教育システムも大事ですけど、親とかがどう思うかというのか、日本の家庭で親とかは、海外行かなくてもいいとか、取りあえず大学は行けよ、みたいなことを言う人も多いと思うので、僕の家庭はたまたま、行ってこいという感じで言われたんですけど、そういう家庭も多いのかなと思ったので、そういう親がどう思うのかとか、そういった家庭環境とか家庭の中でどう思うかという、親側に対しても何かできたらというのは感じました。以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。本日も大変貴重な意見をたくさんいただきました。そろそろ時間になってまいりまして、皆さんの御予定もあろうかと思しますので。

廣津留さん、どうぞ最後に。

【廣津留委員】 ありがとうございます。手短かに。今の親へのイメージというところと奨学金の話をし少ししたいんですけども、私の公立高校、出身校とかを考えると、本当に留学は高い、危ない、もう外に出るのは怖いというイメージが本当にありまして、確かに事実ではあるんですけども、チャレンジをしたい学生には本当にいろいろなオプションがあって。例えば今私が教えている秋田の国際教養大学だと、公立の学費を払ったまま、そのまま交換留学になるので、今のマイナスの影響も受けずにそのまま留学ができたりとか。

先ほど本当に学部生が少ないとおっしゃったハーバードとかスタンフォードとかですけども、今、undergradで調べたら、今年からは、ハーバードの場合は8万5,000ドル以下、世帯収入がそれ以下のところはもう学費がただです。スタンフォードは10万ドル以下のところがただで、コロンビアもそれくらいです。8万5,000ドルは日本円にして今、大体1,300万円

くらいですので、1,300万円以下の世帯収入の人は、学費を払わず、それはもし寮費が込みなのか、学校での生徒のバイト代を計算に入れているかとかは学校についても違うんですけども、それぐらいでただで行けると思ったら、きっとチャレンジ精神のある人たちは、チャレンジするぞと思うと思うんです。

ただ、こうやって「アメリカ、留学、幾ら」で調べると、どうしても高い学費ばかりが目について、なかなかチャレンジができないと思いますので、本当に民間の奨学金とか、「トビタテ！」の奨学金に受からなかったから駄目だったになるのではなくて、本当にこうやっているいろんなオプションがることを知ってほしいと思います。

私が親子で「徹子の部屋」に出たときに、ハーバードの学費を値切ったという話をしたら、すごくネットの記事で話題になったりもして、学費というのは値切れるものではないと思っていると思うんですけども、皆さん恐らく御存じのとおり、海外はいろいろフレキシブルなところもあるので、学費も出てはいるけれども、これは目安にすぎないということもありますので、そういうところも本当に、特に地方ではそういうイメージを、親世代、先生世代、祖父母世代の本当にイメージを変える必要があると思います。

ただ、自分のときを考えても、本当にロールモデルがない、海外に行って活躍しているというロールモデルも本当にまだまだ少ないので、親もリファレンスとなるような存在がないから、知らないから怖いにつながっていると思うんです。なので、とにかく憧れるような存在とか、本当に海外で、こうやっていろいろたくさんの経験をしている渡辺さんのような人がもっと経験を知らせる場があったりとか、そうすることによって、先ほどの正宗さんがおっしゃったストーリーにつながると思います。本当にこれからはストーリーがないと、なかなか人に伝わらない時代になると思いますので、その辺のイメージも考えていただけたらと思います。以上です。

【小路座長】 どうもありがとうございました。それでは、お時間が来ましたので、本日終了させていただきたいと思いますが、座長として若干感想を述べさせていただきたいと思います。

今日はたくさん皆さんの御意見を頂戴し、また湯崎知事、それから渡辺さんの貴重なお話をいただきまして、大変参考にさせていただきました。改めて留学というのは、日本のグローバル社会を構築する、あるいは国際社会の中で人生を充実させていく、こういう目的に向けての留学は一つの手段ではないのかなということを改めて感じた次第です。

ただこの手段であっても、まだまだ日本での異文化の受入れとか、異文化許容度というの

は、思ったほどまだまだ高くはないのではないかと。それから、多様性という言葉が叫ばれてはいますけれども、まだ日本社会での多様性というところが隅々まで行き渡っているかという、言葉先行という感じも、私個人ですけど、勝手ながら受けて、まだまだこの同質性、決して同質性社会が悪いというわけではないですけども、そういった同質性社会から多様性社会への転換をしていこうということが叫ばれておりまして、まだまだその多様性ということが十分に社会に行き渡っていないのではないかと感じました。

そういった意味では、留学ということ、あるいは留学の派遣受入れということを通して、日本社会のグローバル性を高めていき、また、国際社会の中での個人個人の人生の充実度をより高めていくということに資するようにしていければと思います。

長時間ありがとうございました。次回8月6日、そして8月30日、この2回をもちまして、今回のフォーラムについてのまとめをしていきたいと思っております。次回も若干お話をお二方あたりからいただいて、少し質疑をさせていただき、次回8月6日は今回と前回、それぞれたくさん意見を出していただいたのを事務局で、一応発表する中間まとめ案というものを皆さんに御提示をさせていただきたいと思っております。この中間まとめ案を公表して、最終的には文科大臣に提言をとということを現在検討しておりますけれども、そういった内容のものについて、引き続き皆さんから御意見をいただいて、加筆、修正があれば修正ということをしていただきまして、8月30日に最終確認をし、公表し、大臣に建議なり提案をとというふうに進めていきたいと思っております。

それでは、本日の議題につきましては以上とさせていただきます。大変貴重な意見を頂戴しましてありがとうございました。

それでは、次回以降の日程等について、事務局から御説明をお願いいたします。

【伊東視学官】 本日は活発な議論をいただき、誠にありがとうございました。次回、来週8月6日火曜日、16時からの開催を予定しております。第4回目は8月30日に開催予定とさせていただきますので、御予定いただきたくお願いいたします。

なお、委員の先生方におかれましては、本日時間の都合上、御発言できなかった内容等につきまして、事務局宛て御連絡ください。よろしくをお願いいたします。

【小路座長】 よろしいですか。ありがとうございました。長時間にわたり御意見いただきまして、ありがとうございました。本日の議事は以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。お疲れさまでございました。

— 了 —